

合唱団“コダーイ” 第13回定期演奏会 プログラムより

早川 功 2024年5月10日

自宅の楽譜棚を整理していて、かつて作曲家の多田武彦先生に書いていただいた自筆原稿が見つかったので紹介したいと思います。これは1989年に私の所属した「合唱団“コダーイ”」が第13回定期演奏会で私の指揮で「柳河風俗詩」を演奏するにあたり、プログラム掲載に寄稿されたもので、オフィシャルな性格の文章です。会場は上野学園石橋メモリアルでした。

日本歌曲の特異性

多田武彦

祖父や父の職業(二人とも松竹芸能で働く)の関係で、私は子供の頃から長唄や清元といった邦楽をよく耳にしていた。これらの音楽には一部を除いて、西洋音楽の楽譜に見られるような「縦線」で仕切られた整然とした拍子やリズムはないし、ハーモニーもない。また、西洋の詩にあるような韻を踏むケースも少ない。

ただ、支配的なのはフレージング(成句)の妙であった。長唄や歌舞伎で有名な「勸進帳」の始めの方で、義経主従の出のときの「これやこの ゆくもかえるも わかれては しるもしらぬもおおさかの やまかくす」の箇所を例にとると、長唄の方々はこの日本語の意味が聴き手に正しく伝わるように、各フレーズの最初の言葉、(これやの「こ」)(ゆくもかえるもの「ゆ」)を少し大きめに、また子音もたっぷりと歌う。またフレーズの終わりの部分は、曲想に応じて様々な促音(っ)で切る。

これらのフレージングの妙は、美空ひばりも、都はるみも実に見事にやっているし、往年の歌舞伎や映画の名優たち、浪曲や落語の名人たちも正しく行っている。

ところで、明治時代に入って西洋音楽が日本でも採り上げられるようになったが、西洋の詩自体が持つ抑揚を、作曲家たちはほぼ忠実に曲の中に生かしている。全てではないが、名詞・動詞・形容詞・副詞などは強拍部や中強拍部に、冠詞・助詞・助動詞・接続詞などは、弱拍部に來るようになっている。ところが日本語は、一部を除いていくつかの字が集まって一つの言葉やフレーズを形成するので、西洋音楽のルールにそぐわない場合が多い。日本歌曲を歌う人が一番困るのは(ほかにもいろいろあるが)この点である。

「からたちの花」を例にとると、北原白秋の詩の心を大切にしようと思えば、●にウエイトが来る。

● ● ●
「からたちの はなが さいたよ」

となるが、メロディーを西洋音楽の楽典どおりに歌うと

● ● ●
「か | らたちの はな | が さいた | よ」

となる。

こうしてみると、日本歌曲は、西洋の音楽と、日本の詩の交配によって生まれたハイブリッドのばらのようなもので、その美しさは、個々の原種の美しさから生まれた独自の特長をもっている。したがって、その箇所箇所によって

- (1) 音を主役に立てて演奏する。
- (2) 詩を主役に立てて演奏する。
- (3) 両方のバランスを考えて演奏する。

といった工夫が必要となる。

恩師、故清水脩先生は、作曲を習い始めた頃の私に、次のことを教えてくださった。

「歌曲や合唱曲を書く以上、詩自体に内蔵されている音楽に寄り添うように作曲しなければいけない。音を重視する作曲家は、つい自分の音楽を全面に押し出したがる。これでは良い歌は書けない。詩の心に寄り添い、たまに詩の心に逆らって音を聴いてもらう、といったコントラストの妙を持った歌曲は、「冬の旅」や「詩人の恋」のように、永遠に愛唱され続ける」と。

作曲の場合も、演奏の場合も、このことは極めて大切なことと、40年近く経った今も私はこの教えを忠実に守っている。

以上

この頃、多田先生との交流は主に電話でしたが、時には2時間以上電話口で作曲意図や演奏解釈について熱く話されていたことが思い出されます。

この文章ではいかに作曲家が「詩に内蔵されている音楽」を探り、寄り添わねばならないかという趣旨が印象的で、歌手や合唱団はその作曲家の思いを真摯に受け止め、心を込めて表現するのが務めであると言えるでしょう。

[Back](#)

[Home](#)

[多田武彦 <公認サイト> TOP](#)

[HOME PAGE](#)